

Career Power

The 18th Library Fair & Forum Document

第 18 回図書館総合展
キャリアパワー主催フォーラム記録
<PART I >

2016 年 11 月 8 日 パシフィコ横浜にて開催

『進化する図書館』

テクノロジーがもたらす転換の向こうには？PART I

～自動化・機械化の進化に伴って、その先に図書館はどのように変わるのか～

【講師】 近藤 茂生 (立命館大学学術情報部次長)
【進行】 奥田 悠子 (株式会社キャリアパワー常務取締役執行役員)

【キャリアパワー：奥田】

只今より第18回図書館総合展、キャリアパワー主催のフォーラムを開催させていただきます。本日はご多忙の中、全国から多数の図書館関係者の皆様にご参加いただきまして誠にありがとうございます。本日も司会を務めさせていただきます、株式会社キャリアパワー事業本部の奥田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、今年の弊社主催のフォーラムのメインテーマを題して「進化する図書館～テクノロジーがもたらす転換の向こうには～」とさせていただきました。テーマ設定の背景には日々、日経新聞はじめ、テクノロジー、AIに関して記事を目にしない日はなく、記事によってはAIの進化によりなくなるであろう仕事、業種までも想定されている内容もございます。

人材ビジネスに携わっている弊社としましてはテクノロジーの進化に伴って「人」による仕事なくなるのではなく、人による仕事の内容、人の役割がこれまでとは違う、変化すると考えています。従って、あえて人材ビジネスの対極にあるテクノロジーの進化に焦点をあて、今年のテーマとして取り上げさせていただきました。

本日のパート1では今年、最新の機器等を取り入れ運営を開始されている大学図書館の紹介と共にライブラリアンの仕事の役割がどのように変化していくのかを発表していただきます。ご参加いただきました皆様にとりまして有意義な時間になればと願っております。

それでは講演に移らせていただきます。本日、フォーラムの講師としてお招きしておりますのは、2016年4月に新たな図書館「平井嘉一郎記念図書館」を開館されました立命館大学学術情報部次長の近藤茂

生様です。では、近藤様、どうぞよろしくお願いいたします。

【立命館大学学術情報部次長：近藤茂生 講演】

皆様こんにちは。お忙しいところ、ようこそお越しいただきました。只今ご紹介いただきました、立命館大学学術情報部の近藤でございます。よろしくお願いいたします。現在、私は学術情報部というところで仕事をしていますが、図書館それからミュージアム、アーカイブスの3つを所管しています。現在、図書館、博物館、文書館の連携を表す「MLA連携」という言葉もありますが、そういったものを現在、志しておりまして、2015年に出来た新しい部でございます。



本日は、「進化する図書館」というお話で、頂いたテーマは以下の3点です。一つ目はこの先図書館がどうなっていくのか、二つ目は私たちの働き方がどう変わるのか、そして三つ目は図書館職員の役割がどう変わるのかということを、あらかじめご提示いただきました。私は、特に理系の出身でもありませんし、ロボットやAIの専門家でも技術者でもありませんので、視点としては、まず大学と大学図書館を事例として、

大学アドミニストレーターという立場と視点から、そして大学図書館と大学職員の在り方といったことを中心にお話をさせていただければと思っています。

本日のお話の背景を、少し知っておいていただけたほうがいいかなと思いますので、簡単に私自身の自己紹介をさせていただきたいと思います。私は 1986 年に立命館に入り、最初の職場が図書館でした。当時は整理課という名前で、いわゆる目録業務というのを 1986 年から 1991 年まで担当していました。図書館では、当時 NACSIS-CAT が構築され、どんどんと発展していった時代です。図書館がカードから現在のようなコンピュータベースの目録に変わっていくなかで、日々の目録業務に加え、目録業務の機械化や電算化に対応する仕事を中心に、当時の学術情報センター関連では、地域講習会の講師などもさせていただいていました。振り返れば、これは当時の最先端の技術を活用した業務実践であり、大学職員として、当時の最先端の仕事をさせていただいていたのではないかと思います。またこの経験が私のキャリアにおける現在までのベースになっていると改めて思っています。その後、入試の仕事、それから大分県の立命館アジア太平洋大学でも勤務しまして、合わせて 14 年間入学試験の仕事をしていただきました。そしてその後、法人部門に異動しまして、総務部の総長理事室および一貫教育部門において初等・中等教育に 7 年間携わり、3 年前から図書館に、なんと 20 年ぶりに戻ってきたということになります。従いまして、私の立命館での仕事は、大体三分の一が図書館、残りの二分の二は高校と大学の「繋ぎ」といいますか接続教育を担当してきました。本日の話の中には、そうした業務経験、バックグラウンドが色濃く反映していると思いますので、少し最初にご紹介させていただきました。

さて、本日は、まず始めに、平井嘉一郎記念図書館についてのお話をさせていただきたいと思います。そして、新しい技術が、どのように世界に変化をもたらしているか、それは大学図書館に今後何をもたらしていくのか、それから、平井嘉一郎記念図書館にはどのような技術を導入しているかの事例紹介、最後に、これからの大学図書館や大学図書館の職員がどんなことを考えていけばいいのか、どんな存在になればいいのか、といった話をさせていただきたいと思っています。

<平井嘉一郎記念図書館のご紹介>



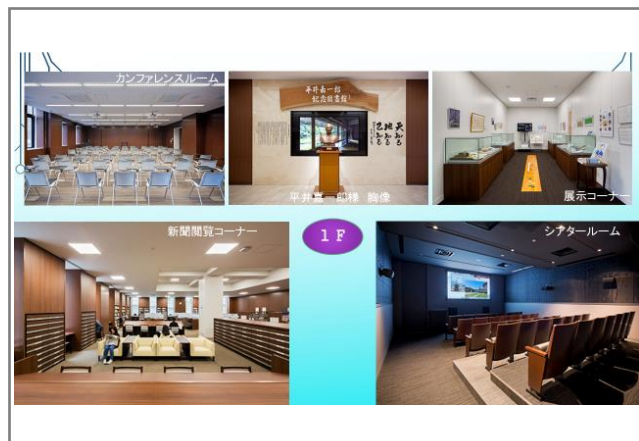
まず、平井嘉一郎記念図書館のご紹介をします。平井嘉一郎記念図書館は、2016 年の 4 月に開館しました。衣笠キャンパスの旧図書館が築 47 年、また、キャンパス全体の建蔽率の制限もあり、旧図書館を潰してこの新しい図書館を開館いたしました。館名の平井嘉一郎氏は立命館大学のOBであり、ご令室である奥様から図書館一棟丸ごとをご寄贈していただきました。金額は申し上げられませんが、大変ありがたいこととございます。そのおかげをもちまして、この春に新しい図書館を作る事が出来ました。平井嘉一郎記念図書館は本学における学習、教育、研究を支える総合図書館ですが、学習機能を強く意識して設計されています。基本コンセプトを「学びが見える、学びに触れる、学びあえる」と、ラーニングコモンズを核とした、学びのコミュニティの中心・拠点となることを目指しています。また、長時間滞在型、学習・研究成果の発信機能、最先端の ICT 技術の導入といった特徴があります。



お手元に平井嘉一郎記念図書館のパンフレットをお配りしています。じっくり話ができればいいのです

が、本日は時間も限りがありますので、画面を見ながら、このパンフレットを適宜ご参照いただければと思います。今、ご覧いただいているのが、1階のライブラリーバレイといいまして、この図書館の一つのシンボリックな存在になっています。2階・3階から天井まで、吹き抜けのロビーから見上げる形で、そこに本が谷のように並んでいます。こちらの写真は1階のエントランス、1番上の写真はちょうど真上を見上げています。真ん中の写真は、自然光を採り入れ非常に明るいエントランス空間になっています。後ほどお話しますが、こちらの写真は入退館ゲートです。

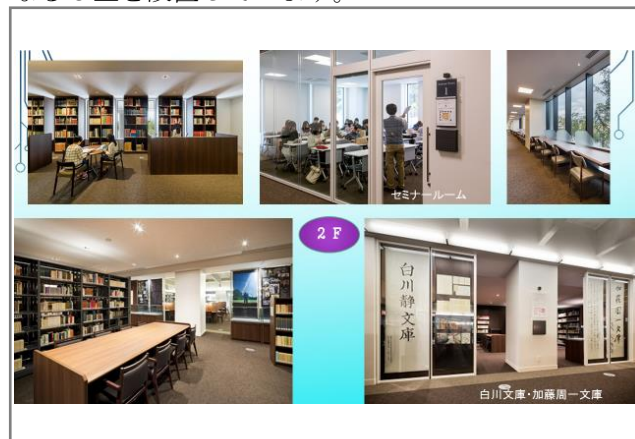
続きまして、こちらも1階の写真です。この平井嘉一郎氏の胸像の後ろには、平井嘉一郎氏のご自宅の四季折々の写真が投影されています。京都に進学した学生や留学生などに、京都や日本の伝統文化を知ってもらう一つの重要なツールにもなっていると思います。それから、こちらがシアタールームです。昨今、学生の教育や学習の手法も変化してきています。図書館においても、従来のように利用者が情報をインプットするだけでなく、情報を加工したり発信したりする場が必要ということで、ちょうどゼミ1教室ぐらいが、入れるようなシアタールームを作りました。



また、1階にはラーニングコモンズ「ぴあら」があります。これもパンフレットでご紹介しておりますので、内容詳細についてはまたご確認いただければと思います。あと、エントランスを入り、右には Tully's (コーヒーショップ) が入っており、学生の皆さんに長時間、腰を落ち着けて勉強して欲しいということで、図書館の中にコーヒーショップを設けています。

それから、2階の閲覧室の写真です。完全にオープンからクローズなものまで様々なタイプの机を取り揃えています。天井もコンクリートの打ちっぱなしな

のですが、間接光によって全体を明るく、柔らかく光を回し、落ち着いた雰囲気を作っていると思います。それから、こちらは白川静文庫です。白川静先生は日本の漢字研究の第一人者で、文化勲章を受章された本学を代表する教員（文学部）です。それから加藤周一文庫もこの4月に開設した、本学の新しい文庫です。こういった文庫・コレクションは、時に図書館のなかで事実上「死蔵」されてしまうこともあるのではないのでしょうか。平井嘉一郎記念図書館の開館に伴い、この二つの文庫は開架にもってきまして、本学との縁の深い先生方の業績に手軽に触れてもらえるようにと作っています。特に、加藤周一文庫につきましては、加藤周一先生の書斎にあった本をそのまま移設しておりまして、貸出しも可能となっています。それから、セミナールームは授業として使えるよう、大きさの異なる3室を設置しています。



次に、3階です。3階は閲覧室の色合いを少し深めにしていまして、より落ち着いた雰囲気としています。平井嘉一郎氏の業績を顕彰するためのメモリアルルームも3階に設置しています。

最後に、地下1階です。地下は、全体的に少し暗くなりがちですので、色のトーンとしては明るくしています。地下1階には貴重書庫を設置しておりまして、隣接して貴重書庫閲覧室も新しく設けています。ところで先ほど、この図書館の特徴として、長時間滞在型の図書館であると申し上げましたが、平井嘉一郎記念図書館では、様々なバリエーションの椅子を取り揃えており、平井嘉一郎記念図書館オリジナル仕様を含め、全体で50種類を超えています。これは、座り心地や雰囲気など、自分の好みの環境を選べるようし、思う存分勉強して欲しいと思っています。地下1階の北側の窓側は、外はグレー一色のコンクリートの壁で景色

は何も見えないのですが、こんな地下の「隅っこ」にある席が意外と人気があって、分からないものだなと思っています。居心地の良さの感覚は個人によって異なっており、図書館設計において、環境の多様性は想像していた以上に重要なものだと実感しています。

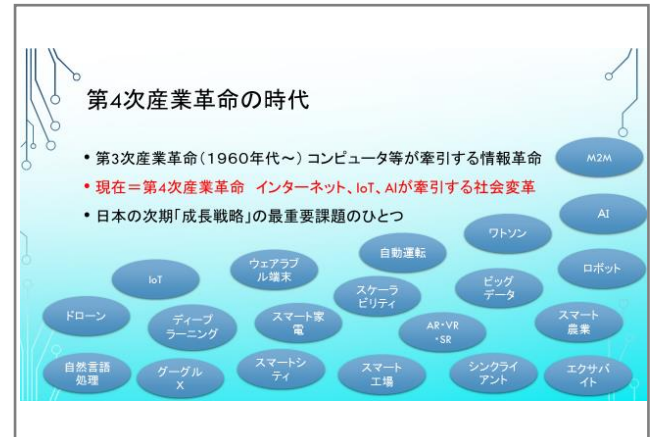
以上が平井嘉一郎記念図書館のご紹介です。このパンフレットの中に、図書館の様々な特徴等を記載していますので、またご質問等がございましたら後ほどでもお声がけいただければと思います。

<1.新しい技術がもたらす社会の構造的変化>

では、本題に入らせていただきます。新しい技術が、社会にどのような変化をもたらししていくのかというお話しなのですが、今日、私は新幹線に乗る時に日経新聞を買いました。冒頭にキャリアパワーの奥田様のお話にも、自動車の自動運転のお話がありましたが、新聞の一面には、自動運転で生じた事故に関して、保険で補償するとかしないとかの記事が掲載されていました。また日経新聞で、先日までずっと連載されていましたのが「AIと世界」という記事です。AIというのが、世の中をどのように変えていくのか、私たちの仕事や暮らしがどう変わっていくのか、そうしたことについて日経新聞も毎日のように取り上げているということは皆さんもお気づきのことかと思います。

いくつかの事例をごく簡単にご紹介していきます。まず、ドローンです。写真は皆さんもよくご存知のネット通販の会社ですが、ドローンでの宅配や、また農業での利用が実際に行われつつあります。次はスマートハウスです。スマートハウスとは、従来はエネルギー効率を高めるという事が主な目的でしたが、昨今はモノに全てコンピューターをつなげ、「IoT」のコンセプトが加わっています。それから、こちらの仮想現実（AR、VR、SR）、また自動車の自動運転ですが、これらはすでにマスコミでもよく取り上げられているテーマですね。次のサービスロボットは、ホテルなどで色々御用聞きをしてくれるものから、物を運んだりする多機能なロボットがあります。それから、写真のロボットスーツのように、人間と機械が一緒に作業するといったロボットも注目されています。また以上の各写真の事例には市場規模を記しています。いず

れも、この20年、30年の間に相当大きな規模で成長していくと言われている分野であることは、お聞きになられた方も多いのではないかと思います。



こうした事例に代表される、様々な新しい技術がもたらす社会の構造的変化を、最近では第4次産業革命という言葉で表現されることもあります。第3次産業革命というのはコンピューターが牽引する情報革命で、現在の第4次産業革命はインターネット、IoT、AIが牽引する社会変革と言われています。そして、この第4次産業革命の実現を日本の成長戦略における最重要課題となっているということを、ここで確認しておく必要があると思っています。

第4次産業革命がもたらす社会を表す一つの言葉として、超スマート社会という言葉があります。要は必要なものやサービスが、必要な時に必要なだけ提供され細かい対応ができ、そして私たちも快適に暮らす事ができる社会ということなのですが、その実現のための一連の取り組みは、すでに「Society5.0」として平成28年3月に「第5期科学技術基本計画(答申案)」として発表されています。すなわち、これからの社会の一つのプラットフォームとして検討が進められているということです。例えば、このスライドにありますように農業分野でいいますと、ドローンだとか携帯、モバイル端末、クラウド、センサー等の複数の技術を連携・協調させ、共通のサービスプラットフォームを構築し、それを活用することで、新しい農業を展開していこうとしているわけです。

また、こういった取り組みは、日本の戦略として「新産業構造ビジョン」という形でも取り上げられています。「痛みを伴う転換か、安定を求めたジリ貧か、日本の未来をいま選択」とあまり品のないキャッチかなとは思いますが、新しい技術がもたらす新しい産業が、